

芭蕉の風狂精神に関する覚え書

竹 島 智 子

はじめに

芭蕉の風狂精神については、すでに、赤羽学氏の名著『芭蕉俳諧の精神』や、栗山理一氏の「風狂の精神」(『芭蕉の本』第二巻所収)に述べられている。栗山氏は、唐代以来の風狂精神が五山の詩僧によって享受され、さらに仏頂和尚に学んだ芭蕉へとひきつがれていくとされた。

本小論では、日本古典文学大系および『芭蕉全集』(角川書店刊)の索引をもとにして、「狂」のつくことばを調査し、国文学史的に、芭蕉の風狂精神を考察したい。

(1) 狂

十三世紀初頭の『方丈記』には、
人を頼めば、身、他の有なり。人をはくくめば、恩愛につかはる。世にしたがへば、身くるし。したがはねば、狂・せるに似たり。

とあり、この「狂せるに似たり」は、「気ちがいじみて見える」の意である。

また、十四世紀初頭の『徒然草』序に、

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

と見える。この「ものぐるほしけれ」も、「気ちがいじみた気持がする」の意である。

これをふまえて、芭蕉は、自らを、

あら物狂ほしの翁や(閑居ノ箴)貞享三年作か)

と述べた。

さらに、元禄六年、仁斎は、

剛を好で学を好ざれば、其の蔽や狂なり。(『童子問』)

と言い、この「狂」も、悪い意味である。

これらよりして、「狂」一字の時は、「気ちがい」という意であるが、兼好や芭蕉には、芸術的色彩が見られる。

(四) 狂歌

狂歌の源流は、『万葉集』の戯笑歌や『古今集』の俳諧歌までさかのぼれることは、周知のとおりである。

『後鳥羽院御口傳』(成立年時不詳)には、

折につけて、きと哥詠み、連哥しないし狂歌までも、にはかの事に故あるやうに詠みし方、真実の堪能と見えき。

とあり、和歌に対し、滑稽を盛った戯れの歌を「狂歌」としていた。

江戸時代にはいつて、天和元年の連句でも、

ストント。茶入落しては命とも 其角

とりあへず狂哥仕る月 才丸

と見え、滑稽味がうかがえる。天和二年の連句には、

下り立てのり物近く人遠く 昨雲

狂哥に茶屋の硯水召ス 暁雲

とある。大谷篤藏氏の注は(角川書店刊『芭蕉全集』第五巻所収)、

人遠き景よき所に駕籠をとめて、頭に浮んだ狂歌を認めんと、

硯水をわざわざ遠い茶屋から持ってこさせる風狂人

としている。江戸時代には、滑稽を基調とする俳諧が栄えたが、この「狂歌」は、単なる滑稽にとどまらない意味を持っている。

さらに、貞享二年、

うす雪は淀の天守を降かねて 東藤

狂哥の僧に駕籠をたよかす 翁

とし、芭蕉は、狂歌の僧に好意をそそいでいる。また、「むかし狂歌の才士此国にたどりし事を不図おもひ出て申侍る」(『冬の日』)とも言い、芭蕉は、竹斎を「狂歌の才士」と見て、賞讃の気持を托した。

(五) 狂句

十四世紀中頃に成立した二条良基著『連理秘抄』『筑波問答』に見える「狂句」は、「滑稽な句」の意である。また、十五世紀中頃の『吾妻問答』(宗祇著)では、

次に連歌士俳諧と申し候。狂句などのこと也。俳諧体と申すは、利口などしたる様の事也。

とあり、木藤才藏氏のしるされたように(日本古典文学大系本による)、俳諧と狂句は、ほぼ同一内容をさしていたと考えてよいであろう。

また、

中むかしもてはやせしは、俳諧の狂句なり。たとへば、

かまくら山にあぶらぬらばやと云に

頼朝のまちやる月こそきしみけれ

しどけなき軽口のみ出て月も花も笑ひあかして、しづかなる事侍らず。(路通編『芭蕉翁行状記』)

と見え、「狂句」とは、笑いあかす軽口であったようである。

かくて、鎌倉時代末期より室町時代にかけて、「狂句」「俳諧」「滑稽な句」は、相等しいことばとなった。「狂句」の「狂」は、

「正統でないもの」換言すれば、「滑稽」「軽口」の意を持つていたことがわかる。

さらに、江戸時代にはいつて、寛文十二年の「貝おほひ」跋は、「伊陽城下横川漫リニ跋ス」として、

松尾氏宗房雅伯、為予断金之友。其性嗜滑稽、潜心於詠諧者、幾^レ換^レ伏臘^ニ矣。今茲春正月閑暇之日以童謡俚近之語^ヲ作^レ狂句^一者^ニ繪^レ若^ク干。

としるし、ここでも、「滑稽」「詠諧」「狂句」は、相等しいことばとなつてゐる。『冬の日』（貞享元年作）で、芭蕉が、

狂句こがらしの身は竹翁に似たる哉

としるした「狂句」も、「滑稽な句」と自ら謙遜して述べたものであるが、単なる滑稽にとどまらないようである。この自己を客観視した飄々たる句は、従来より自由な俳諧精神を思わせる。続いて、『笈の小文』（貞享四年作）には、

百骸九竅の中に物有。かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすもののかげに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好こと久し。終に生涯のはかりごととなす。

と見える。この「狂句」にも、謙遜自嘲の意がこめられ、「生涯のはかりごと」となさざるを得なかつた芭蕉の狂句への執着がうかがえる。

中世の「狂句」は、単に滑稽を意味していたが、芭蕉に至つて、自己を謙遜し、自嘲した内面的深まりが見えるようになったことが注目される。

さらに、

前句付も明和の頃漸く変化を生じて狂句となり、狂句とは世に川柳と称するものなり。（中根淑著『前句源流考』）

とあるように、「狂句」は、狭義には、明和の頃から川柳を意味するようになった。

(二) 風狂

鎌倉時代（十三世紀末）の『沙石集』（日本古典文学大系本による）には、

大唐、国清寺ニ豊干禪師ノ弟子ニテ、拾得ト云行者、寒山子ト伴ナヒテゾ遊ビケル。カノ拾得、有時、僧ノ布薩スルヲミテ、「幽々タルカナ、頭ヲ集テ何事ヲカナス」と云テ咲ヒケレバ、老僧嘖テ、「風狂子、我が説戒ヲソシレル」ト云ヲ聞テ、「嘖コトナキハ即戒也。心清ハ即チ出家也。我性は汝ト合。一切ノ法ハ如シ是」ト云テ（後略）

とあり、渡辺綱也氏が「風狂子」を「気ちがい」と注釈されているように、悪い意味に用いられていることは、明らかである。室町時代にはいつて、一休（一三九四年—一四八一年）は、『狂雲集』卷三百三十二に、

慚愧聲名不覆藏。
伴歌爛醉我風狂。

吟懷夜々中峰月。

幻住僧無三宿桑。

としるして、自ら「風狂」と名のり、

風狂・狂客起狂風。

来往姪坊酒肆中。

具眼衲僧誰一撈。

画南画北画西東。

とも述べ、自由人の面目を見せた。

また、風狂は、謡曲にも見えることは、赤羽学氏の指摘されたとおりである（『芭蕉俳諧の精神』）。

江戸時代にはいると、

市人にいで是うらん笠の雪

酒の戸たたく鞭の枯うめ

朝白に先だつ母衣を引つりて

此第三は門人杜国が句也。此第三せんと、人々様々いひ出侍るに、師のいはく「此第三の附方、あまた有べからず。鞭にて酒屋をたたくといふ事は、風狂の詩人ならずばさも有まじ。枯梅の風流に思ひ入ては、武者の外に此第三有べからず」と也。

（『三冊子』）

と見え、芭蕉は、杜国を「風狂の詩人」と賞讃している。また、

翁の曰ク。「俳諧といふに、三ツの品あり。寂寞はその情をい

へり。女色美肴にあそびて、飢食のさびをたのしみ、風流はその

すがたをいへり。綾羅錦繡に居て、薦着たる人をわすれず。

風狂は其言語をいへり。言語は、虚に居て実をおこなふべし。

実に居て、虚にあそぶ事はかたし。此三ツの品は、ひくき人

に、高き所をいふにはあらず。高き人の、ひくき所をいふな

り」とぞいへる。（『風俗文選』）

とある。芭蕉の言う「風狂」とは、「虚に居て実をおこなふ」ところより生まれ、風のように狂い戯れる自在な境地を言ったもので、よい意味に用いられている。

さらに、芭蕉の門人土芳は、

龜山や嵐の山や此山や

馬上に酔てかへられつゝ

前句の「や」の字響、ともに酔てそよる成體を付頭はず。一句

風狂人の俳也。（『三冊子』）

として、狂い戯れた様子を述べた。許六も、

常に風狂の遊士、此臺にのぼつて、風水の二を争ふ。（『風俗文

選』）

とし、自由な様子を伝えている。

ところが、支考になると、

ざるを、芭蕉下の学者にも、萬法放下の風狂人ありて、たま

々「我家の俳諧は、無分別の所にあり」といへる故翁の一語

を聞たがへて、口にまかせて言ちらすに、（後略）（『俳諧十論』）

とあり、芭蕉の説を誤解して、きままにふるまうような俳人（暗に惟然をさす）も出たらしい。そうなると、この「風狂」は、芭蕉の頃のよい意味をすぎて、悪くなつてしまつてゐる。

元来、気ちがいの意味であつた「風狂」に、一休は、自由人としての自己を投影し、芭蕉は、さらに一步進めて、自在な境地という俳諧精神を托した。しかし、芭蕉没後には、度をすぎて、きままな

意味も「風狂」に托されたようである。

ところで、『大漢和辞典』で「風狂」を見ると、「風がはげしく吹く。狂風」とあるのみで、中国では、自然現象に用いていたことがわかる。次いで、『広辞苑』で「風狂」を見ると、「①風雅に徹したこと。②きちがい。狂気。」とあり、すでに引用したところでもわかるように、日本では、自然現象に用いていない。かくて、中国の「風狂」に比し、日本の「風狂」が、より精神的で、芭蕉に至って深い意味を持つようになったと言えよう。一方、芭蕉没後は、その風狂も怪しくなっていたらしいことを知る時、芭蕉文学の本質は、高度の風狂精神に見いだせそうであり、參禅が内因していることは、申すまでもあるまい。

(再) 狂 客

前記のとおり、『狂雲集』に「狂客」ということが見え、「風狂」と似通った意味を持つことは明らかである。

江戸時代にはいつて、芭蕉は、

其日申の時ばかりに何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにいたる。「酔翁狂客月にうかれて来たり」と声々によばふ。(『堅田十六夜之弁』元禄四年作)

として、「風狂の士」の意にした。支考は、

狂客なにがし、しらゝ・吹上とかたり出ければ、月も一きははえあるやうにて、中々ゆかしきあそびなりけらし。(『芭蕉庵十

三夜』)

として、「風狂の客」の意を持たせた。同様に、去来は、

我が老吟に伴なへる人々は、雲けぶりの風に変ずるが如く、朝々暮々かしこにあらはれ、此に跡なからん事をたのしめる狂客なり。共に風雅の誠をしらば、暫く流行のおなじからざるも又相はげむの便なるべし。(『贈其角先生書』)

とした。也有は、

咄々房委通は、一たび天台の教に入、豆腐崑蕩の清僧なりしをいかにおもへるならむ、只かしらのみ其儘にて、袂は浮世の色にそみかへり、或は和歌を学び、茶に樂しみ、殊には俳諧に遊ぶ狂客とはなれりけり。(『蕪衣』)

として、「俳諧に遊ぶ風狂の士」を言った。かくて、「狂客」は、俳諧の隆盛した江戸時代に集中して見え、脱俗の姿勢がうかがえる。

『大漢和辞典』に見える「狂客」は、「①常規を逸した奇行のある人。②楊花の名。③桃の名。」とあり、日本の「狂客」が、中国より深い意味を持っているように思う。

(三) その他

以上で、主要なところは述べたが、他に、芭蕉関係の作品から風狂精神の見られるものをあげる。

わけてさびしき五器の焼米 清風

みの虫の狂つくれと啼ならん 芭蕉

(貞享二年六月二日東武小石川ニおいて興行「賦花何俳諧

之連歌』)

(巻) らくの貞室、須磨のうらの月見にゆきて、「松陰や月は三五や

中納言」といひけむ、狂夫のむかしもなつかしきままに、このあきかしまの山の月見んとおもひたつ事あり。〔鹿島紀行〕貞享四年刊)

火桶抱(い)てをとがいほぞをかくしけり 路通

此作者ハ松もとにてつれづれよみたる狂隠者、今我隣庵に有。俳作妙を得たり。(元禄元年十二月五日付 尚白宛芭蕉書簡)

岩鼻やここにもひとり月の客 去来

先師の意を以て見れば、少狂者の感も有にや。〔去来抄〕
いづれも、悪い意味はなく、芸術的に高められた風狂精神が感じられる。

おわりに

本小論で引用した芭蕉作品の成立年代を調べると、貞享年間に七カ所あり、元年より二、三、四年に及ぶ。次いで、元禄年間には二カ所で、元年と四年に見え、四十歳代前半に集中していることがわかる。もつとも、弟子による聞書は、芭蕉の述べた時期が判明しないのであるが、芭蕉の「狂」は、初期と晩期には見られないように思う。芭蕉の芸術上の所産が、高度の風狂精神であるが、晩年には、そうした風狂のポーズをもはらった安らかな境地(軽み)を志向したと考えてよいであろう。

執筆者紹介

井本久美子	竹島智子	北村英子	山本和子	竹内美千代	安田純生	大橋正叔	杉藤美代子	嘉部嘉隆	西畑実	久保重	原田芳起
本学国文学科 昭和五十年三月 卒業	本学国文学科 昭和四十四年三月 卒業	本学国文学科 昭和四十八年三月 卒業	本学講義師	本学兼任教授	本学講義師	本学講義師	本学助教	本学助教	本学助教	本学教授	本学教授